

# 川上音二郎 からの葉書

後 藤 隆 基

川上音二郎が、妻の貞(彼女が「貞奴」を名乗るのは渡米後、本名の「貞」と芸名時代の「奴」を合わせて芸名にしてから)

と、十三歳の姪のシゲ、それにフクと名づけた愛犬をともなつて、わずかに十四尺余(およそ四・三五m)の短艇「日本丸」に乗り込み、築地海岸から太平洋に漕ぎ出したのは、明治三十一(一八九八)年九月十日未明のことである。

南洋探検……朝鮮から上海香港、シンガポール、インド洋を経由してヨーロッパをめざす……太平洋を横切りアメリカへ……。各新聞をみるところ、音二郎のめざした目的地は明示されていない。けれども、いずれも共通して八月二十七日付で東京府より得た、清・韓・英・仏・米への遊芸海外渡航免状を所持していたと報じているから、洋行の志はもっていたのだろう。

しかし、九月十五日付『時事新報』が「一葉の扁舟に棹して川上音二郎米国へ押渡る、狂か暴か判断つかず」と伝えているように、手漕ぎのボートによる無謀な航海は人びとの失笑苦笑をさそい、新聞各紙は彼の代名詞であった「オッペケペー節」をもじって記事を草すなど、さまざまな憶測と揶揄が乱れ飛んだ。かねてより音二郎の天敵ともいわれた『萬朝報』の黒岩涙香などは、きびしい筆致で音二郎の奇行を罵倒したのである。

音二郎は後年、川尻清潭のインタビュアー(『名家真相録』『演芸画報』明治四十一年十月)に「時勢が変わって来て、私が以前に尽くした苦勞を証明して呉れる人が無い始末で、殆ど厭世主義になつて了つて、世の中の事を見たり聞たりするのが嫌で、

何か新空気のある所へ行つて、新規の人間の顔が見たいやうな気がし」たと答えている。音二郎の突拍子もない行動の所以は何だったのか。

年譜を繙いてみるに、明治三十一年、音二郎は二度の総選挙に出馬したがいずれも落選の憂き目を見ており、その間には、歌舞伎座興行の不入失敗も重なった。やや遡って明治二十九(一八九六)年、神田三崎町に総坪数二百余坪、定員一千余人の三階建て洋風劇場「川上座」を建設・開場するも、たちまち経営難となり、人手にわたるを余儀なくされた。こうした諸事情を踏まえ、伊原敏郎は「要するに川上は自分の新演劇に行詰つたのである」(『明治演劇史』)と断じている。

明治二十年代、川上音二郎は、まさに新しい演劇の旗手として劇壇に登場した。もとは自由民権運動に志をよせた一壮士、「自由童子」を名乗って各地を演説して廻り、過激な政府批判で検挙されること幾たび、芸人鑑札を手に入れて講釈師にもなり、やがて演説に代わる方法として芝居に目をつけた。

明治二十(一八八七)年二月、京阪の歌舞伎役者の一座に「川上音治郎」として参加したのが、彼の俳優生活の端緒といわれる。十二月に保安条例が施行されると、翌年には「浮世亭○○」と改名、落語家に転じて「オッペケペー節」を口演し、これが大評判を呼んだのである。

明治二十四(一八九二)年二月、矢野龍溪

原作『経国美談』や『板垣君遭難実記』といった演目を自ら脚色して、川上音二郎一座を堺・卯の日座に旗あげ。劇団員は誰も芝居などしたことのない素人ばかり、音二郎は歌舞伎を芸の手法としながら、元自由党の壮士だった経験を活かして演説を基調とした政治劇をよく演じ、怪我人続出のリアルな争闘場面を売り物に、しだいに市中に名を広めていく。

しかし、もとより芝居人としての自覚に乏しく、むしろ政治青年の気分を引きずったままの役者たちは、公演中に臨席の巡査に議論や喧嘩を吹かけたり、客席からの野次に応じて見物と大乱闘を起こすなど、拘引・収監されて獄中に幾日を暮した者も少なからず、座長である音二郎も取調べを受け、裁判沙汰にさえなったという。

音二郎の演劇は政治運動の延長線上にはじまったわけだが、やがて芝居の道へと専心していく。新聞小説の劇化、単身渡仏して彼地の脚本や演出を持ち帰った翻案劇の上演、日清戦争劇による歌舞伎座進出など、近代演劇の礎ともなる足跡をのこしたのである。

けれども、多額な費用を捻出しての選挙出馬は、消えずに残っていた政治への思いをしめしている。それが落選という形であらわれたとき、音二郎は妻とともに何処へつながるとも知れぬ大海へと小舟を漕ぎ出した。自棄か、彼一流のパフォーマンスカ。いずれにせよ、この航海によって音二郎の演劇人生が転換

したことはたしかだろう。

横須賀の海軍基地に紛れこみ、説得をうけてシゲとフクは下船させる。しかし川上夫妻は人の制止も聞かず、ふたたび權をとった。

各地の港を転々し、出発からおよそ四ヶ月、明治三十二(一八九九)年正月に漸う神戸港へたどり着く。水腫に蝕まれた音二郎は数週間の入院を余儀なくされるが、四月、サンフランシスコ行き商船「ゲリック号」に乘込み、一座を率いてアメリカからヨーロッパへ巡業。一連の顛末は、同時代のメディアも頻繁に報道している。そして、明治三十三(一九〇〇)年のパリ万博の舞台が欧米中の喝采を浴びた——という噂を内地にまで響かせながら、翌三十四年正月、出港地の神戸に凱旋したのである。

#### \*

三重県鳥羽市の「鳥羽みなとまち文学館 岩田準一と乱歩・夢二館」に、川上音二郎から届いた葉書が所蔵・展示されている。「紀伊田並海岸」から、志摩鳥羽国の「宮瀬東洋夫」に宛てたもので、明治三十一年十二月十六日の消印は、ちょうど音二郎が太平洋上でボートに揺られていた時期と重なる。

昨夏、鳥羽を訪うた折、岩田準一のご令孫で同文学館長をつとめる岩田準子氏のご厚意に与り、葉書の文面を拝見させていただいた。幸いにも翻刻・掲載のお許しを賜ったので、ここに謝意を表しつつ全文を引き写しておこう。

謹啓追々寒氣之候ニ御座候處御健  
全奉賀候御地滞在中ハ種々御配慮ニ  
預リ難有御礼申上候扱テ日々逆風而已  
打續候保残念ナカラ各港灣碇泊ニ時日  
ヲ費シ居候處漸ク去十日ヲ以テ大島  
ヨリ尤モ難場ノ聲アル潮ノ岬ヲ経テ当  
田並ニ到着仕候ニ付御安意相成處先  
ハ不取敢御報迄  
孰レ神戸港到着ノ日ヲ期シ縷々御報  
申上ヘク候早々

音二郎からの私信は、鳥羽滞在中、世話になったことへの礼と、鳥羽を出港してから道程を伝えている。紀伊半島東岸を鳥羽から南下、本州最南端の潮岬を過ぎて間もない「田並」とは、現在の和歌山県東牟婁郡本町田並である。鳥羽から海路を行けば、ゆうに二〇〇kmをこえる距離だ。

明治三十一年十二月十六日付「都新聞」は、音二郎が田並から同紙の記者に宛てた手紙を掲載している。その文面をくればると、田並上陸をしめす「去十日」の日付が、新聞のほうでは「十二日」とズレていたり、また少しく詳細が加えられているにせよ、内容は宮瀬東洋夫の受けとったものほとんどと変わらない。音二郎は上陸のたび各新聞社へ現況報告を送っていたが、宮瀬のもとに届いた葉書も、そうした一枚であるらしい。

なぜ、この葉書が鳥羽みなとまち文学館にあるかといえば、受取人の宮瀬東洋夫は、岩田準一の実父なのである。

明治三十三年三月十九日、鳥羽に生れた準一は、宮瀬を名乗っていた時分に竹久夢二と知遇を得、絵画を学んだ。同じころ、鳥羽の造船所で働いていた江戸川乱歩とも出会っている。大正九(一九二〇)年十二月に両親が離婚したため母方の岩田姓となり、長じては志摩地方の民俗学を修め、男色研究において一家言をもったことで知られる。

それでは、宮瀬東洋夫とはいかなる人物だったのか。岩田準一の次男、つまり東洋夫にとつて孫にあたる岩田貞雄氏の文章(「亡父岩田準一」「竹久夢二」その弟子——絵人万葉集——所収)によれば、宮瀬家は矢の出で、生糸繭種商を営んだ初代の太治兵衛が財をなし、幕府への多額の献金によつて御用商人となり、苗字帯刀を許された(このときは宮本姓)。

つづく二代目が早世、三代目は勘定方として才をしめすと藩に登用され、新たに「宮瀬」の姓を授かる。多くの愛妾をもった彼は、そのうちの一人、おとくに「津の国屋」という置屋を経営させた。

志摩地方に特有の船女郎「はしりがね」をかかえ、明治に入るところを本業に暮しを立て、やがて嫡子である東洋夫が跡を継ぐ。のちに準一がこれを研究対象として「志摩のはしりがね」を著したのも、家との関係を無視できないだろう。

宮瀬家の四代目となる東洋夫は父に劣らず多彩な女性関係を結ぶなど、遊蕩児の一面もあったというが、旭銀行(「三重銀行史」には、大阪に本店をもつ「旭銀行」

が鳥羽に進出したのは、明治二十九年から三十四年とある)を経営したり、当時としては珍しい「写真」が何枚ものこっているなど、進取の氣風を有していた。また、鳥羽町の初代町会議員や鳥羽小学校の学務委員をつとめ、町の中心人物であったことが察せられる。

音二郎の帰朝後に出版された「川上音二郎欧米漫遊記」には、明治三十一年十二月頃「鳥羽に一週間ばかり逗留し」たとあり、この間に音二郎らの面倒をみたのが、宮瀬東洋夫だったのだろう。そして音二郎はほとんど間をおかず、東洋夫に礼状を出している。音二郎はじつに筆まめな人であった。

平成十二(二〇〇〇)年、福岡市博物館で開催された「川上音二郎と1900年パリ万国博覧会展」の展示図録に何通かの書簡(早稲田大学坪内逍遙博士記念演劇博物館蔵)が紹介されているが、なかでも静岡県焼津の漁師「鰻屋金作」へ宛てた葉書が興味を惹く。

カリフォルニア滞在中のもの、ロンドンからはバッキンガム宮殿で英国皇太子に舞台を見せたことを伝え、渡仏後、パリ万博の盛況を知らせた一枚もある。明治三十四年、二度目となる欧州巡業の際にも、わざわざベルリンから年賀の便りを出している。この焼津の漁師について詳細はわかっていないが、おそらく明治三十一年の航海の折に援助を受けた相手とおもわれる。今後の課題として、各寄港地を調査し、市井の人とのつながりを

をたしかめる必要もあるだろう。

宮瀬東洋夫や鰻屋金作ばかりでなく、困難をきわめた短艇の航海を、川上夫妻は土地土地の人びとに助けられて乗り切った。たとえば前掲の『漫遊記』には「川上の最も感銘して忘れない事は、掛塚の漁師で内藤由蔵、鈴木丑五郎の兩人の深切である、由蔵は船で、丑五郎は陸を與に川上の跡を見え隠れに附いて、遂ひに志州鳥羽まで来て呉れた」といった記述もみえる。

メディアへの通信は、たしかに話題づくりの一策であつたかもしれない。けれども、各地で世話になつた人びとへ認めた一枚一枚の筆蹟からは、その義理に篤い人柄が窺えよう。行く先々の民衆に親しまれた人間的魅力は、川上音二郎という演劇人を知る上で大きな手がかりとなるにちがいない。

（立教大学大学院 後期課程中退）